



漢方トゥデイ

2025 年 2 月 6 日放送

漢方経方医学シリーズ②

経方理論での気血水

広島大学病院 漢方医学センター 教授 小川 恵子

今回は、経方理論での気血水の解説をします。

経方理論では、人体を動的なものとしてとらえます。気血水を動かし、正常な循環を回復させ、例えば利水と同時に滋潤します。これが、経方理論の切れ味が良い理由であり、経方理論における気血水の概念を理解することは非常に需要です。

古代中国医学は特に気概念が根幹をなしています。経方理論でも気が重要ですが、『傷寒論』における邪正闘争を担う「正気」を胃気と考えます。『黄帝内経』には、「穀胃に入りて、胃気上りて肺に注ぐ」「人に胃の気無きを逆という、逆なるものは死す。」「脈に胃気なきも亦た死す。」とあります。

『傷寒論』の条文は胃気の状態を治療対象にしています。食物を摂取して胃気が産生され、全身に供給されることによりほかの臓器や器官が働くと考えます。そして、脾・肌はいつでも利用可能な形で胃気を蓄える場となります。ですから、肌を見たり触診することによって患者さんの状態を知ることができます。

気は、中医学では元気・宗気・衛気・営気などいろいろな名前がついていますが、経方理論では、衛気を重要視します。衛気は、日中は表に出てきて表をめぐって邪気の侵入を防衛し、夜になると陰である裏に潜っていき五臓六腑を潤します。そのため夜になると表から気が減り、人間は眠くなって寝てしまいます。また、このような時に風邪をひきやすいというのもよく経験します。衛気の出入りにより睡眠リズムが形成されるのです。

気は体内では液体として循環するので、気とは「体内を流れる温かい液体」と定義できます。

広義の血（拍動し、温かく流れる水と血）とは、狭義の気＋狭義の水（津液）＋狭義の血であり、広義の気（温かく流れる液体）は広義の津液であり、狭義の気＋狭義の水（津液）です。狭義の津液は液体という素材、狭義の気は流れる・温かいという機能、狭義の血は閉鎖循環している特殊な津液である（血管内にある）と定義されます。つまり、気は単独では循環することが出来ず、循環するには血や水（津液）に乗りなければならないのです。例えば、採血した血液は狭義の気が伴っていないので、広義の血ではありません。輸血されると、狭義の気を得て循環し、広義の血となります。

『内経』では、経絡が気血の運行を主ると定義しています。この場合の経絡は、現代医学でいうところの脈管と考えられます。脈管は動脈、静脈、リンパ管です。脈管の中を流れているものは営血で、血液とリンパ液を含みます。脈管の外側を併走して流れる気を脈外の気（衛気の一つ）といいます。例えば鍼灸治療で気の流れを整えることによって循環が改善したり、浮腫が改善するのはこの機能によるものです。

簡単にまとめますと、経方理論では、気血水は共同して一体となって機能する、そしてどの経路で循環が妨げられているのか、全体として気血水の虚はあるのか、を考えます。その際に、「深さ」を考える皮・肌・肉、「部位」を考える胸・膈・心下とその他の臓腑、が重要になってきます。

例えば、寒邪との邪正闘争なのに、なぜ発熱するのだろうか？と考えたことはありませんか？経方理論では、悪風・悪寒は皮で起こる感覚ですが、発熱は肌および肉で起こります。身熱・悪熱・煩熱などもすべてが肌および肉の部分で生じます。つまり悪寒・悪風と発熱はそれぞれ生じる場所は異なっており、そのため同時に存在することが可能となります。もし、これらが同じ層で起こっている現象であれば、悪風・悪寒と同時に発熱が起こることはないはずです。

このように、ある病態において深さを考慮して処方を考えることは生理学的にも矛盾がなく、理解しやすくなりますし、病邪が存在しない状況も説明できます。例えば、激しい運動をすると筋肉を流れる血流は平常の 20~30 倍、心拍出量は 5~6 倍、そして熱産生量は 10-20 倍になって発熱し、発汗によって熱を冷まします。経方理論で考えると、激しい運動によってパワーアップされた胃気が肌気・皮気、あるいは脈外の気となって外出し、全身の発熱となるわけです。

また、経方理論における気血水の流れを理解するためには、『三焦』を理解するとわかりやすいです。三焦は六腑の一つであり、表裏関係の臓がないので、「孤府」と呼ばれています。臓腑の中では三焦が最も大きく、血脈以外の気津が循環する場の総称です。具体的には胸・膈・心下、皮気、肌気、脈外の気の経路、腠理、さらには直達路なども三焦を構成しています。

三焦は上、中、下焦に分けられます。『靈樞・營衛生会編』には、上焦は胃の上口より上の胸の部位で、中焦は胃から空腸、下焦は回腸より肛門側、大腸、膀胱の部位であるとされ

ています。経方理論は、ある意味で「三焦論」であるということが出来ます。経方理論では、三焦という言葉を使わなくても気血水の循環を考えることができます。

さて、衛気の出入りにより睡眠リズムが形成されるというお話をしました。衛気の環流と睡眠周期がずれると、皮の衛気が不足し、眠気、倦怠感、冷えなどの症状を呈します。衛気に着目し治療を行った症例を提示します。

40歳の女性です。一日前、学会のためにフランスのパリに到着しました。日本との時差は8時間です。前の夜は時差のため眠れず、そのまま学会に出席しました。倦怠感と背部の寒気あり、身の置き所のなさを感じました。脈は、沈弦細按じて細渋、両側尺が按じて無力で、朝、衛気の出を鼓舞するため麻黄附子細辛湯を内服したところ、寒気、倦怠感は改善しました。胃気を改善し、心下の飲を下すために昼食前に半夏厚朴湯を内服しました。その後は睡眠周期が整い、演題にも集中することができ、業務に支障ありませんでした。

このように、経方理論によって、今まで理解が難しかった現象が理解できるようになります。また、『傷寒雑病論』における人体の観察力の鋭さがより理解できるようになるでしょう。

今回は、気血水の概念についてお話ししました。要点は、①気を産生する場は主に胃である②胃気を蓄えるのが脾と肌である③気は単独では循環することが出来ず、循環するには血や水（津液）に乗じなければならない④治療に際してはまずどの経路で循環が妨げられているのか、全体として気血水の虚はあるのか、を考える⑤「深さ」を考える皮・肌・肉、「部位」を考える胸・膈・心下とその他の臓腑、が重要である、ということをお話ししました。

次回は経方理論における心下・膈・胸と五臓についてお話しします。